

RAILWAY & CINEMA

今回は、一九八五年に公開されたフランスのドキュメンタリー映画「ショア」を紹介する。この映画は、クロード・ランズマン監督が五年以上の歳月をかけて撮ったナチスによるユダヤ人大虐殺（ホロコースト）に関するものであり、上映時間は、九時間半に及ぶ。ホロコーストに関する映画は、フィクション、ノンフィクションと相当数あるが、本作品が最も重要な映画であることは間違いない。ドキュメンタリー映画であるが、虐殺シーンや残酷なシーンは皆無であり、第二次世界大戦後約四十年を経た時点での関係者へのインタビューを中心にしたものである。この映画に登場する絶滅収容所は、ポーランドにあるヘウムノ、トレブリンカ、ゾビブル、ベウジエツ、そしてアウシュビッツ（ビルケナウを含む）であり、インタビュの対象者は、一九八〇年代に生存しているユダヤ人被害者、SS（ナチス親衛隊）の看守、鉄道従業員をはじめとした収容所近傍の住人達である。

映画の冒頭登場するのは、最大三十四万人の人達が主に毒ガス自動車で虐殺された収容所ヘウムノである。この収容所で生き残ったユダヤ人は、わ



「SHOAH ショア」
DVD-BOX ～虐殺の証言～
(5枚組 DVD)
ショア / 1985年・フランス映画・541分
発売元 / 角川映画
販売元 / ジェネオン エンタテインメント
価格 / 24,150円(税込)

鉄道と映画 — 19

生存者、その目撃者・傍観者。
悲劇を体験した者だけが知る記憶。

Shoah 「ショア」



文・羽生次郎
text by Jirou HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FCC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

ずか二名と言われており、そのうちの一人で、当時少年だった収容者が登場し、彼が小船で川を下りながら往時の状況を説明する。一見長閑なポーランドの田舎の風景の中で、残酷な内容の話が淡々と語られる。このインタビュを皮切りに、被害者、加害者、傍観者及びホロコーストの研究者などの証言が続くが、監督自身がインタビュして被害者の最も辛い出来事に関する証言を引き出す場面は、余りにも残酷ではないかと思わせるほどであり、収容所から生き残った人達になぜ自殺が多かろうかと思わせるほどであり、これらの人達は、限界を超えた残酷さを経験したのであり、時間が癒すことはできなかったからである。

一方加害者の側は、かなりの知性を持つインテリから小市民的な元SS兵にいたるまで、償いたい罪を犯したという認識が全く無い。トレブリンカのSSの元看守は、「わたしの定義を教えよう。ベウジエツは、(死の)実験場。トレブリンカは、(死の)原始的ベルトコンベア。アウシュビッツは、死の工場だった」と得々として証言するシーンには、人間性が感じられない。傍観者は、当初は、ユダヤ人に同情的な証言をするが、段々とその利己的な感情が明らかになっていく。この映画を見終わると人種差別と排外主義の根深さを実感させられる。

インタビュの合い間合い間に映されるのが、一九八五年現在のポーランドの鉄道である。駅舎や収容所への引き込み線の他に、貨物列車が延々と映し出される。これは、ユダヤ人ホロコーストの実行の際、大きな問題の一つが移送であり、その手段が鉄道であったことに由来すると思われるが、映し出される列車が蒸気機関車だけに、当時移送に使われた家畜運搬用の貨物列車を見ているような感覚を持つてしまう。今まで紹介した映画の中で美しい列車走行場面は数多かったが、蒸気機関車と牽引車両がこれほど陰気で、稠々しく見えてくるものは、この映画以外に無い。その意味では、鉄道のシーンは、このドキュメンタリーで大変重要な、象徴的な意味を持っていると思う。

一般公開の可能性は低いので、劇場でご覧になれるチャンスは少ないかもしれないが、機会があれば一度は見るべき映画だと思う。